

論究日本文學

第 92 号

論文

- 立命館大学蔵山田美妙旧蔵書
 および美妙書入本『此ぬし』について ……………福井辰彦(1)
- 未來社と山田耕作 ……………荻野純哉(13)
 —詩と音楽の交流—
- 遠藤周作『深い河』論 ……………泉谷瞬(29)
 —「混沌」の女性/インド—
- 歌舞伎・清玄桜姫ものにみる「袖」のはたらき ……松葉涼子(41)
- スサノヲと祇園社祭神 ……………鈴木耕太郎(55)
 —『備後国風土記』逸文に端を発して—
- 『夜の寢覚』表現攷 ……………岸本悠子(73)
 —「心づくし」と「夜な夜な」—

書評

- 中川成美著
 『モダニティの想像力——文学と視覚性』 ……………井口時男(91)
- 小助川元太著『行誉編『塙囊鈔』の研究』 ……………鈴木元(95)
- 二本松康宏著『曾我物語の基層と風土』 ……………小井土守敏(99)

新刊紹介

- 立命館大学中古文学研究会編
 『平安文学研究・衣笠編』について ……………中西健治(103)
- 木田隆文・田村修一・外村彰・橋本正志 共編
 『ひたむきな人々—近代小説の情熱家たち—』 ……三上聡太(106)

2010.5

立命館大学日本文学会



山田美妙書入本『此ぬし』表紙

敬！ 足板万歳！
 歳、万歳！

万歳万歳

同五十四丁裏蔵書印

紅葉山人著

万歳万歳

同一丁表蔵書印



同見返し書入

蘇摩芋と生薑... 其の甘味より... 日曜の早朝より用事あり... けふ小苗一朶... 今去歲より... 其の甘味より... 大丈夫金の胸相と椅子... 七六

蘇摩芋と生薑... 其の甘味より... 日曜の早朝より用事あり... けふ小苗一朶... 今去歲より... 其の甘味より... 大丈夫金の胸相と椅子... 七六

蘇摩芋と生薑... 其の甘味より... 日曜の早朝より用事あり... けふ小苗一朶... 今去歲より... 其の甘味より... 大丈夫金の胸相と椅子... 七六

同七丁裏・八丁表

立命館大学蔵山田美妙旧蔵書

および美妙書入本『此ぬし』について

福井辰彦

一

立命館大学人文系文献資料室に所蔵されている山田美妙関係資料は、書簡・草稿類と旧蔵書から成る。

そのうち美妙宛て書簡と草稿類については、二〇〇六年に発足した白楊荘文庫研究会が調査・研究を開始し、現在は同会を引き継いだ立命館明治文学研究会が書簡集の公刊を目指して翻刻作業を進めている。その経緯やこれまでの成果の一端は、青木稔弥「山田美妙関係手稿」のことなど（『日本近代文学』七八、二〇〇八・五）、中川成美「立命館大学所蔵山田美妙関係資料について」（日本近代文学館年誌『資料探索』四、二〇〇八・九）に紹介されている。

一方、旧蔵書は、他の資料と区別されることなく受入、配架されているうえ、当初の受入台帳や図書カードといった記録も所在不明であるため、どの本が美妙旧蔵書なのか、その点数すら確定

できないというのが現状である。作家の旧蔵書およびそこに見られる書入が、極めて高い資料的価値を有することはいまさら言うまでもないことであり、このような美妙旧蔵書の現状は決して看過し得ない問題であろう。そこで、前述の立命館明治文学研究会では、美妙旧蔵書の全体像把握にも取り組むこととなった。調査はまだ始まったばかりであるが、新たに判明したこともいくらかあること故、ここにその途中経過を報告してみようと思う。

二

立命館大学人文系文献資料室内の準貴重書庫には「明治・大正本」と総称される近代文学関係の貴重書コレクションが収められており、山田美妙関係資料のうち書簡・草稿類は、その一部として整理・配架されている。また、この「明治・大正本」の中には、美妙著作や美妙書入本も見られる。したがって、立命館大学が所蔵している美妙旧蔵書のかなりの部分が、ここに含まれてい

る可能性が高い。さらに、二〇〇三年、大西仁氏を中心とする当時の立命館大学日本文学専攻大学院生らによって作成された「明治・大正本」の目録を確認してみると、美妙の書簡・草稿類や美妙著作には、七一六〇〇番台の資料番号が付されていることが分かる。「明治・大正本」の中でも、資料番号七一六〇〇番台の資

料に美妙旧蔵書が含まれている蓋然性が高いわけである。そこで、筆者と村田裕和の両名でこれらの資料を調査した。その概要をまとめたのが次の表である。蔵書印や書入により、美妙旧蔵書と確定できたものには網かけを施した。

資料番号	書名	蔵書印	書入	備考	著者	刊年	発行元
71606	二人比丘尼／色懺悔（新著百種第一号、再版）				尾崎紅葉	明22・6・10	吉岡書籍店
71607	風刺文学／妙な依頼				山田美妙	明43・11・5	朝野書店
71608	大通世界 二号	印	索引		幸堂得知標注	明24・7・31	春陽堂
71609	妙な夫婦				山田美妙	明43・9・2	千代田書房・杉本梁江堂
71610	やたらじま（聚芳十種第三卷）	印		[著者寄贈]	山田美妙	明24・3・25	春陽堂
71611	紅鹿子	印			尾崎紅葉	明23・10・13	春陽堂
71612	盗賊秘事				山田美妙	明24・12・4	青木嵩山堂
71613	滑稽／妙な術				山田美妙	明42・11・5	大学館
71614	ぬれころも 初篇	印			山田美妙	明21・12・18	金港堂
71615	小説／血の涙	印			リサアル著 山田美妙訳	明36・10・3	内外出版協会
71616	滑稽／妙な水				山田美妙	明43・2・5	大学館
71617	家庭教育／園の二葉				山田美妙	明24・12・2	青木嵩山堂
71618	顧知滑稽／お笑草	印			映笑子編 山田美妙補	明33・1・1	青木嵩山堂
71619	腕だめし（袖珍小説第十一編）				山田美妙	明35・7・1	博文館
71620	お伽噺／はらだち机			旭彦印	仰天子	明30・7・6	金港堂
71621	金港堂豪傑噺／小供の清正	印		日付なし	森桂園	明36・1・5	金港堂書籍
71622	美妙集				山田美妙	明43・12・18	春陽堂
71625	此ぬし（新作十二番）	印	多	[著者寄贈]	尾崎紅葉	明23・9・1	春陽堂
71626	再考三日月	印		[発行所寄贈]	村上浪六	明24・7・7	春陽堂
71627／8	九二ツ引新太平記 上・下	印		日付なし	山田美妙	奥付ナシ	青木嵩山堂
71629	金忠輔	印	少		山田美妙	明37・2・15	今古堂書店
71630	史外史伝／平重衡	印			山田美妙	明43・6・15	千代田書房・杉本梁江堂
71631	平清盛				山田美妙	明43・12・4	

71632	嫁入り支度に／教師三昧（新作十二番）	印					山田美妙	明23・10・15	春陽堂
71634	いち／姫	印				稲舟印	山田美妙	明20・3・27	金港堂
71635	小説／佚男児						山田美妙	明35・3・20	青木嵩山堂
71636	小説／人鬼						山田美妙	明35・10・1	青木嵩山堂
71637	漁隊の遠征						山田美妙	明36・1・1	青木嵩山堂
71638	夕すずみ（春夏秋冬第二）						山田美妙他	明37・5・23	博文館
71639	小説／女装探偵 後編						山田美妙	明25・5・29	博文館
71640	小説／武者魂						山田美妙	明29・11・1	青木嵩山堂
71641	断腸録				少	稲舟印	山田美妙	明33・1・1	青木嵩山堂
71642	短編小説／明治文庫 第五編	印				山田美妙	明26・12・15	博文館	
71643	新調韻文青年唱歌集 第一編					山田美妙	明24・8・19	博文館	
71644	新調韻文青年唱歌集 第一編	印				山田美妙	明41・6・25	文錦堂・萬卷堂	
71645	新体詞華／少年姿			校正		山田美妙	明19・10	香雲書屋	
71646	開国五十年唱歌（訂正版）					旭彦蔵か	明40・10・30	磯部屋書店	
71647	国歌教材／日本地理唱歌（修正三版）					「見本」印	明37・2・28	斯文堂	
71648	征露戦歌／民の声					山田美妙	明20・2	香雲書屋	
71649	新体詞選（再版）	印				山田美妙	明35・11・21	青木嵩山堂	
71650	評釈／博多小女郎浪枕					日付なし	明24・10・21	丸善書店・武蔵屋叢書閣	
71651	鐘権三重帷子 山崎与次兵衛寿の門松			線引			明23・8・28	武蔵屋叢書閣	
71652	関八州鷲馬（再版）			線引			明39・6・27	岡崎屋書店	
71653	吉野郡女楠	印		線引			明35・5・18	青木嵩山堂	
71654	評注近松著作集（日本浄瑠璃叢書卷之三、八版）					近松門左衛門作	明32・7・16	青木嵩山堂	
71655	日用書翰文紀事論説文／言文一致作例					山田美妙	明34・9・16	此村欽英堂	
71656	美文活法					山田美妙	明35・10・9	青木嵩山堂	
71657	言文一致最新用文					山田美妙	明41・11・3	文錦堂書店	
71658	新体詩歌作法					山田美妙	明34・9・16	青木嵩山堂	
71659	言文一致女子普通文					山田美妙	明35・10・9	青木嵩山堂	
71660	美文詳解					山田美妙	明41・11・3	文錦堂書店	
71661	日本室内粧師法（女学全書第五編）					山田美妙	明25・6・21	博文館	
71662	美人詞林／衣香扇影					山田美妙	明32・8・20	青木嵩山堂	
71663	仏教格言集					山田美妙	明33・3・17	濟美館	
71665	日本大辞書 第八巻					山田美妙	明26・5・7	日本大辞書発行所	

立命館大学蔵山田美妙旧蔵書および美妙書入本『此ぬし』について

71666	日本大辞書 付録	印	山田美妙	明26・12・19	日本大辞書発行所
71667	伽羅文庫(第一年第一号)				
71674	わが妻子(切抜帖)	印	山田美妙	明34・3	中央文壇社 判読不能

以下二点不明

71671	我楽多文庫(第十二号)				
71673	百華(第一卷第二号)				

以下自筆資料等

71623	埋火之里				
71675	なつこだち				
71676	竖琴草紙				
71677	画本				
71683	山田美妙宛 はがき				
71684	山田美妙 写真 その他				
71685	山田美妙の筆蹟(五点)				
71686	山田美妙宛書簡(五三通)				
71687	石橋思案より山田旭彦宛手紙				
71688	山懸滯三郎より山田美妙母宛手紙				
71689	山田美妙の手紙(二通)				

この調査によつて明らかとなつたのは以下のような点である。

- 一 七一六〇〇番台の資料に記入されている受人日付は、いずれも昭和二十八年(一九五三)十月二十五日であること。(ただし日付を欠くものも数点ある。)
- 二 同番台の多くの本に美妙蔵書印が見られること。
- 三 同番台の一部に書入が見られること。
- 四 蔵書印の有無と書入の有無とは必ずしも一致しないこと。すなわち蔵書印を欠くものも、旧蔵書である可能性

があること。

- 五 美妙の他、田沢稲舟の蔵書印、山田旭彦の印・書入が見られること。

- 六 七一六〇〇番台以外の資料にも、美妙の蔵書印・書入は見られること。

なお、七一六〇〇番台の資料には欠番があるが、これに該当する資料の存否は不明である。

特に注目すべき資料としては、以下のようなものを挙げるこ

ができる。

○此ぬし(七一六二五)

明治二十三年(一八九〇)九月一日発行。

見返しに「著者寄贈」と記す。本文中には朱の傍点・傍線・かぎ括弧、欄外には朱で記した評語が、多数見られる。

○鎗権三重帷子・関八州繫馬・吉野都女楠(七一六五一〜三)

『鎗権三重帷子』は明治二十四年十月二十一日発行、『関八州繫馬』は明治二十四年一月二日発行再版本、『吉野都女楠』は明治二十三年八月二十八日発行。

いずれも全体に亘り多数の朱線が引かれている。傍線部を含む行頭には、傍線を付した語句の頭文字を記している。用例採取に用いたものか。

○稲舟印

『いちご姫』(七一六三四、明治二十五年二月二十七日発行)には「田沢」印(円形・陽刻・楷書)、「田沢錦蔵書印」印(方形・陰刻・篆書)が、『短編小説明治文庫第五編』(七一六四二、明治二十六年十二月十五日発行)には「田沢錦蔵書印」印が、それぞれ見られる。

○旭彦書き入れ

『はらだち机』(七一六二〇、明治三十五年六月六日発行)には旭彦印あり。

『開国五十周年唱歌』(七一六四六、明治四十一年六月二十五日

訂正発行)後表紙に「明治四十年六月卅日もらふ／午後三時ころ／曇ノチ雨／ス、シイAY」とあり。

○七一六〇〇番台以外の旧蔵書

・『熟語大辞林』(二三六三三、昭和五十六年六月十八日受入)

美妙蔵書印あり。増補・校正の書き入れ多数あり。

・『伊呂波節用大全』(二三六三三、昭和二十八年十月二十五日受入)

冒頭十四頁、朱の線・修正あり。所々墨書による修正あり。書き入れは端の切れているものがある。末尾遊び紙には旭彦の落書きがあり、「Yamada Ashiko」と記している。

今回の調査によって、これまで未分類の状態で他の本と混在していた美妙旧蔵書の一部を、それと確定することができた。それらの資料番号と受入日が、ほぼ共通することも、これからの調査の手がかりとなるであろう。著者尾崎紅葉寄贈本で、しかも美妙による多数の書入が見られた「此ぬし」や、二点の美妙著作に押されていた田沢稲舟の蔵書印など、近代文学研究の上で重要な資料が含まれていることも改めて確認できた。今後はまず「明治・大正本」の悉皆調査を実施し、さらには「明治・大正本」に含まれていない美妙旧蔵書の探索を進め、立命館大学に存在する美妙関係資料の全貌を明らかにしてゆく必要があるだろう。

今回の調査で判明した美妙旧蔵書のうち、最も資料的価値の高いものは、尾崎紅葉寄贈・美妙書入本『此ぬし』であろうと思われる。そこで、本章では同書とその書入について詳しく紹介する。

尾崎紅葉作『此ぬし』は、明治二十三年（一八九〇）九月一日、春陽堂から「新作十二番」の第二作目として刊行された。木版刷和装本で、口絵には『文選正文』の書影や芳年による錦絵風の美人図を配するなど、凝った造りの本として評判となった。梗概は以下の通り。

信州の貧家の生まれながら、苦学の末、帝国大学特待生となった小野俊橋は、粗末な借家に弟俊次と下女の婆さんと、三人で暮らしている。隣家は前権大書記官薄井某の邸である。この薄井の娘龍子は俊橋に思いを寄せ、日々窓から彼の姿を見つめているが、精神を懦弱にし、志ある男子を墮落させるものとして女を嫌い、無妻主義を標榜する俊橋は見向きもせず、かえって不快に感じている。そこで龍子は、まず俊次に親しくなろうと彼を家に招き、もてなすが、それを知った俊橋は激怒し、薄井邸に二度と行くなと俊次に言い聞かせる。俊次は仮病なども使って龍子の誘いを断っていたが、あ

る日薄井家の飼いだ「あんぢうゑ」にかみつかれ、けがを負う。龍子はその謝罪のためと、小野家に日参し、何とか俊橋に会って話がしたいと願うが、俊橋は頑なに会わない。すると龍子は手紙を寄越すようになり、遊びに来た俊次にも手紙を託すが、このことが一層俊橋の怒りを買ひ、俊次は七日の外出禁止を言い渡される。外で遊べぬ俊次は吹矢で遊ぼうと思いつき、隣家の庭の鳥を射ようとする。それを見ていた俊橋は吹矢を借り、自分も矢を射るが、それは誤って龍子の右目に刺さってしまう。龍子はこうなつたうえは自分を妻にして欲しいと訴え、俊橋はそれを承諾する。

美妙書入本の見返し部分上部には、美妙と思われる筆で「著者寄贈」とあり、また、一丁表右下と、五十四丁裏本文末尾には「『美妙斎蔵』印（長方形・陽刻・草書）がある。本文中、多くの個所に朱の傍点・傍線・かぎ括弧が見られ、また欄外にはやはり朱で多数の評語が書き入れられている（口絵参照）。

以下、書き入れられた傍点・傍線・かぎ括弧、評語のすべてを、丁を追って列挙することにする。

①六丁表三〜四行 (二二) 芍薬、(『紅葉全集』第二卷(岩波書店、一九九四)一四四頁七行)

「其窓より覗ふ美しき「化物」あり」に傍点。

②六丁表 (二二) 芍薬、【全集】一四四頁六〜二二行) 欄外

拈華微笑の外

色々側面

③六丁裏一行 (二二) 芍薬、【全集】一四四頁二二行)

「出入の度に態と此方より睨みけるに」の「睨み」に傍点。

④六丁裏三〜六行 (二二) 芍薬、【全集】一四四頁一三〜一五行)

「我等にも有事にて、書見に倦み精神疲れし折から：無心に眼を開き、茫然とする事あり。」にかき括弧。

⑤六丁裏 (二二) 芍薬、【全集】一四四頁二二行〜一四五頁三行) 欄外

句ゆるくはなはだ拙

⑥七丁表二行 (二二) 芍薬、【全集】一四五頁四行)

「いやなやつ」に傍線

⑦七丁表 (二二) 芍薬、【全集】一四五頁三〜一〇行) 欄外

今一息の形容は是非ともほしいに

⑧七丁裏 (二二) 芍薬、【全集】一四五頁一〇行〜一四六頁一

行) 欄外

尻のしまらぬ下女のうはさ、いつか話したら抜けてどこへ行ったか?

⑨八丁表二行 (二二) 芍薬、【全集】一四六頁一〜二行)

「満腹々と箸を捨てぬ」に傍点。

⑩八丁表 (二二) 芍薬、【全集】一四六頁一〜七行) 欄外

それは夫としてこゝは妙

⑪同

俊次の風采中々の
手際

俊次の風采中々の
手際

⑫二丁表 (二三) 馴染、「全集」一四八頁六〜二二行) 欄外

吉村なぜ力を入れ
て俊次をつかむか
龍子の前の言葉に
不相応

吉村なぜ力を入れ
て俊次をつかむか
龍子の前の言葉に
不相応

⑬一三丁裏一行 (二三) 馴染、「全集」一五〇頁六行)

「綺麗な女」に傍点。

⑭一四丁表 (二三) 馴染、「全集」一五〇頁二行〜一五一頁一
行) 欄外

此面俊次を描
いた処中々手際

此面俊次を描
いた処中々手際

⑮一八丁表六〜一〇行 (四) 意見、「全集」一五四頁二〜四行)

「さらば俊次これに答て見よ…俊橘の顔をじつと見て一言も吐
かざれば」に傍点。

⑯一八丁表 (四) 意見、「全集」一五三頁一五行〜一五四頁五
行) 欄外

中々上出来

中々上出来

⑰一八丁裏二〜三行 (四) 意見、「全集」一五四頁五〜六行)

「我も小野俊橘の弟なり。今少しむづかしき問題懸けよ」とに
傍点。

⑱一八丁裏 (四) 意見、「全集」一五四頁五〜一一行) 欄外

匠巻

匠巻

⑲二四丁裏 (五) 風邪、「全集」一五八頁一五行〜一五九頁四
行) 欄外

人から聞いた位では
まだ急な事龍
子が俊吉を知る
とは言へ共それ
で深く恋ふとは
龍子も□々白
痴の女

人から聞いた位では
まだ急な事龍
子が俊吉を知る
とは言へ共それ
で深く恋ふとは
龍子も□々白
痴の女

⑳二九丁裏七〇八行（一六）縁日、『全集』一六二頁一六行

「仮初にも此女の面前には悪徳萌し難く」に傍点。

㉑三七丁表（一七）狂犬、『全集』一六八頁五〇一〇行）欄外

龍子が好機会を
よろこぶ処が欠け
て残念

龍子が好機会を
よろこぶ処が欠け
て残念

㉒三七丁裏（一七）狂犬、『全集』一六八頁一〇一〇一六行）欄外

受くべき理由は
あるのにわからぬ
男

受くべき理由は
あるのにわからぬ
男

㉓四〇丁裏（一八）玉章、『全集』一七〇頁一三行一七二頁三

行）欄外

いくらか相手の心を
知るものをこのみ
じまんは何事かあ
、卑陋の婦人

いくらか相手の心を
知るものをこのみ
じまんは何事かあ
、卑陋の婦人

㉔四三丁表（一八）玉章、『全集』一七二頁一三行一七三頁四

行）欄外

決してかう言へ
る訳は無い

決してかう言へ
る訳は無い

㉕四四丁表（一八）玉章、『全集』一七三頁一行一七四頁一

行）欄外

厚かましい龍子
の前の言葉もし其
口から真実出たもの
ならば俊橋はます
ます嫌ふが正当

厚かましい龍子
の前の言葉もし其
口から真実出たもの
ならば俊橋はます
ます嫌ふが正当

㉖五二丁裏（一十）吹矢、『全集』一八一頁六十三行）欄外

文の足らぬため一
寸見ると心付いて
俊橋が吹箭を吹
いたと見える

文の足らぬため一
寸見ると心付いて
俊橋が吹箭を吹
いたと見える

四

前章では立命館大学蔵美妙書入本『此ぬし』に見られる書入を紹介したが、ここでいまま少し、この本と書入について考察を加えておく。

まず、紅葉から美妙に贈られた「此ぬし」については、明治二十三年（一八九〇）九月のものと推定される紅葉の美妙宛て書簡に言及がある。この書簡は本間久雄旧蔵、現在は早稲田大学図書館に所蔵されている（文庫一四C038）。塩田良平『山田美妙研究』（人文書院、一九三八）、本間久雄「美妙と紅葉」（『明治作家論』（早稲田大学出版部、一九五二）所収）の二書に引用されているが、両者には異同が見られるので、いま早稲田大学図書館のホームページで公開されている画像に拠り、改めて冒頭部分を引用しておく。

御手紙難有拝見いたし候

此ぬしは体裁だけ見て中は見ぬがよし

緋縮緬の袖口から引張り出して見たら毛むく

ぢやらな手がぬつと出て興さめましょ

卑怯な言草ゆゑ可成謹慎いたしをれど

四日間の健筆疾風の砂を捲くごとく

紅葉一代つひぞなき一気呵成の文章

どうしても鳥にない事は出来ぬものなり
 わじるしは名評乃公既に其覚悟にて
 半身美人身悶の状を人もあらうに芳年
 とおいでたちや

此ぬしの失作（失策の地口 unpopular

work）は覚悟の前西に向つて合掌

して居れば天助ありて刃が三段に

折るれば仕合せ。末法の世なればさうも

ゆくまいかッ？

本間氏はこの書簡を引用したあと、

紅葉が、春陽堂の「新作十二番」の一つとして『此ぬし』を公けにしたのは二十三年九月で、一部を美妙にも送つた——紅葉の送つた『此ぬし』は山田家に遺つてゐる——ので、美妙が、その感想でも書いて紅葉に送つたものと見える。「御手紙難有拝見」とはそれを云ふのであらう。そしてこの手紙で、美妙は多分、この作を余りに艶つばいので「わじるし」とでも評したのであらう。

と述べている。本間氏が「山田家に遺つてゐる」と言っている『此ぬし』がすなわ現在立命館大学にある『此ぬし』なのであらう。

次に美妙の書入、特に評語の内容について考えてみる。『此ぬし』に対する美妙の評語は、

(一) ⑤⑥のような文章の拙さを指摘するもの

(二) ⑦⑩⑪⑭⑯⑰⑱のような性格や感情の描写に関する批評

(三) ⑧⑫⑬⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕のような登場人物の不自然な言動に対する批判

とおよそ三種に分けることができようである。このうち(二)では、⑪「俊次の風采中々の手際」、⑭「此面俊次を描いた処中々手際」などと、俊次の描写を高く評価している。一方、(三)では、⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕に見られるように、龍子の言動の不自然さが特に批判されている。この本が贈られた時期、紅葉をはじめとする硯友社同人たちと美妙とは次第に疎遠に成りつつあったとされる。塩田氏も本間氏も、先に引いた紅葉書簡を、そうした両者の微妙な関係を示す資料として挙げていた。しかし、これらの評語は、批判すべき点は批判し、評価すべき点はきちんと評価する、公平かつ適切なものと言える。そこには気まずくなりつつあった紅葉との関係とは別に、彼の作品を誠実に味読しようとする美妙の姿勢が表れているように思われる。

『此ぬし』の同時代評の中には、美妙とよく似た評価を下しているものがある。明治二十三年九月二十七日『日本評論』に掲載された秀野生「此ぬし」である。比較のためにその一部を引用してみる。(引用は中島国彦編『文芸批評大系明治篇』第一巻(ゆまに書房、二〇〇五)に拠る。)

然れども「此ぬし」の重なる価値は、其結構にあらずして、文章を鍛煉したるにあり。文章を鍛練したるにあらずして、よく苦心して人情の秘奥を穿たんとしたるにあり。而して最も精細に描き出し最も巧妙を極めたるは、俊吉なり。幼き罪なき心胸より溢れ出でたる一語一言平かにして然も興あり、凡にして然も情あり。一段又一段、龍子の愛に馴れて親み來るの様、目に見るが如し、其芍薬、馴染、縁日の諸章に於て信に其然るを知る。

本編、人物の撰択及び其性行を描くや難なし。然れども龍子が今の書生の文弱に流るゝを慨げき、磊落雄剛の俊橘に一身捧げんとする健気の性質は、著者が苦心して写し去りうらみなきにも関らず、著者は何処までも可憐なる淑女として龍子を描かんとしたるに關らず、日々窓より覗ひ、一日俊橘学校より帰宅の折柄、はたと顔見合せ龍子は此の機とあわて、一礼し、障子ぴしやりと立てたりとは余りに暴露に失して、可憐の態度をして墮落せしめ、あはれにも蓮葉娘、浮気娘たらしめしはおしむべし。

(ママ注記は引用者による。)

文中「俊吉」とあるのは、内容から見て「俊次」とあるべき所である。俊次の性格が良く描けている点を評価し、龍子の行動の不自然さを批判する、という点が、美妙の評と一致している。

最後にもう一点、美妙が『此ぬし』評を公に発表していたこと

も判明した。明治二十三年十一月十四日「読売新聞」附録に掲載された紅葉の批評「寄美妙詞契」の冒頭に次のようにある。

先般は改進紙上にて拙著《此ぬし》の御批評をかたじけなくし、千万御礼申上候。扱此程は御作《教師三昧》御寄贈に預り、一矢返せとの御言葉につき、所存を申述べむとは存じ候へども、御承知の通り批評脳なき詞弟大の説理下手にて、標準も定規もなき机前の雑談同様に御見做し被下度候。

これに拠れば、明治二十三年十一月頃、『改進新聞』に美妙の『此ぬし』評が掲載されていたはずであるが、この時期の同紙を所蔵する機関は見当たらず、この記事を確認することができなかつた。なお、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』第十一卷（昭和女子大学光葉会、一九五九）所収の美妙著作年表にも該当するものは見られない。

以上、立命館大学が所蔵する山田美妙旧蔵書、特に美妙書入本『此ぬし』について、現在判明している範囲で報告を行った。

今年、二〇一〇年は山田美妙没後百年に当たり、秋には日本近代文学館、早稲田大学、立命館大学の三機関による山田美妙展が、国文学研究資料館の協力を得て開催される。これら三機関に分かれて所蔵されてきた美妙関係資料が、半世紀以上の時を経て、一堂に会することになるわけである。また、美妙全集の企画

も進行中であるやに聞き及ぶ。永らく停滞気味であった美妙研究が大きく進展しそうな状況である。この機会に立命館大学における調査・研究も着実に進捗させ、貴重な資料が死蔵されることのないよう努めたいと考えている。

（ふくい・たつひこ 本学講師）

注

（一）受人時に付された資料番号と思われる。現状では、これとは別に、溯及入力の際に付された新しい資料番号が存在するが、美妙旧蔵書確定にあたっては、旧番号の方が有効なので、本稿では専らこちらを用いた。

また、準貴重書庫内の資料の請求記号も、ラベルの剝落、溯及入力時の新記号付与などのため、複雑な様相を呈している。そのため本稿では、敢えて請求記号を示さなかつた。

付記

引用はすべて通行の字体に統一し、振り仮名は原則として省略した。また明らかな誤字は訂正した。